

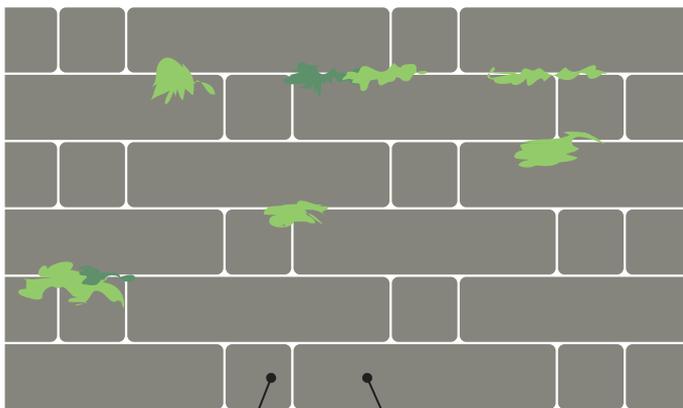
山手地区のブラフ積擁壁について

◎外国人居留地としての山手地区は、慶応3年(1867)の開放以来、道路の開削や宅地の造成に伴って各所に大小の崖地が生じ、木柵による土留から順次石積の擁壁へと整備されていった。

その多くは今なお山手地区に現存し、山手地区の主要な景観要素となっている。対岸の房州石を用い、長さ70~80cm、20cm角程度の石材を一本毎控えをとる積み方で、煉瓦積でいえば一段に長手面と小口面とを交互にみせるフランス積に似た積み方をとっている。

在来の間知石積を主流とする伝統的な石積とは異なり、洋風石積の系譜に属すると考えられるが、その出所は明確にしえない。山手地区のみならず、横浜市や横須賀にもこの積み方が及んでいるが、山手にちなんで「ブラフ積」という呼び方が一般化している。

出典:『都市の記憶—横浜の土木遺産』昭和63年10月発行, 横浜市歴史的資産調査会



小口面 長手面

